

彙報

教育研究會例會

十二月六日(土)午後二時より五時まで心理學第一實驗室に於て、「児童中心より社會中心へ——コンミニュニテイ・スクール」と題して關西學院大學教授森昭氏の研究發表があつた。その要旨を示せば、先づコンミニュニテイ・スクールの成立の由來を明らかにすべく、第十九世紀末より第二十世紀初頭にかけて從來の固定した教科書中心或は教師中心の教育が、社會と教育との間のずれが意識されることによつて、ドイツ及びアメリカに於てそれぞれ児童中心の新教育へと移行した過程をドイツとアメリカとを對比して論ぜられ、ついでアメリカに於ける新教育の結果を明らかにされた。即ち此の新教育に於ては學習は興味本位となり訓練を排除し臨機應變的な授業が行はれたのであるが、かの經濟恐慌を契機として反省を生じて教育の再編成が目論まれると共に、教科書中心であつた古き教育であるアカデミーの再解釋が見られ、児童中心教育とアカデミーとの有機的統一が求められたのである。ここに興味あることは、既に一九二〇年代にデモクラシーの哲學を説き社會中心の教育を唱へたデューイの所説が、この時に到つて受け容れられ十分なる意味に於て指導的中心となつたといふことである。デューイはよれば

教育は児童をしてコンミニュニテイの概念を把握せしめること
 やまた思考の善き習慣を作らしめることにある。かくしてそれは児童中心より社會中心或は生活中心の教育に移つたものであると言ひ得よう。即ち問題を解決しようとする心の態度を作ることが教育の理念となるのであり、その場合一方に於て問題とは社會のもつ問題であり他方に於てそれを解決するのが個人であるところに、社會と個人との統一を解決するに至る。けれどもデューイのもつ制約は彼が児童中心を十分に通過してゐない點にある。即ちデューイの立場は「學校の社會化」に重點があるに對し今やアメリカの教育に於ては問題は「社會の學校化」にあると言ひ得るのである。

デューイに於ては社會の把握の仕方に重點が置かれるが故に、コンミニュニテイに對する種々なる分析が見られる。コンミニュニテイは單にゲマインシャフトと同一視されてはならない。それは或意味に於て封建的なゲマインシャフトから機械的なゲゼルシャフトへの分裂を通じて更に再び有機的な關係の芽生えはじめたものであつて、之を譯すならば生活共同體ではなく共同生活體とでもするのが適當であらう。而して此のコンミニュニテイと學校との關係については、コンミニュニテイの中に學校の在ることが自覺されるべきであり、學校とコンミニュニテイとの間に生ずる溝を橋をかけることが必要なのである。その方法として市民の生活改善に奉仕するために學校がのりだすの

である。そして児童を社會生活に於ける有能な干與者にするこ
とが教育の目的となり、それを達成するための條件として(一)
社會的理解(二)社會的態度(三)社會的熟練が擧げられる。
ところでこのやうなコンミニュニテイ・スクール概念が我が國
に受容される場合に注意すべきことは、児童中心の教育を徹
底したアメリカと異つて、我が國は児童中心教育を殆んど通つ
てゐないが故に、コンミニュニテイ・スクールに示される精神を
十分にとり入れなければ社會的需要によつて児童を壓倒してし
まふ危険があるといふことである。従つてデュイイの立場が兒
童中心に先んじてなされた社會中心の考へ方であるといふ點に
於て、現在の段階に於ける我が國の教育に適するものとなると
いふ結論を見出された。

(蜂屋 慶)

前 號 目 次

宗教藝術の基本的契機……………文學士 河本 敦夫	「大學の理念」の史的展開……………文學士 森 昭	シラアの美的立場……………文學士 吉田 忠勝
--------------------------	--------------------------	------------------------